

## 新学習指導要領を具現する小学校国語科「読むこと」領域の授業改善（第二年次）

～確かな言語能力を身に付けさせる授業と評価の工夫～

福島県教育センター 長期研究員 土屋 智明

### 1 研究の趣旨

新学習指導要領では、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得と、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことが重視され、関連して言語活動を充実することが求められている。国語科でも、言語能力を身に付けさせるための具体策として、言語活動例が示された。この新学習指導要領の主旨を具現し、実践していく際の改善すべきポイントを明らかにした上で授業を行い、その効果を検証していきたいと考えた。

第一年次研究の成果としては、「言語能力を身に付けさせるために、言語活動と言語能力との関連を十分考慮することの重要性」「言語活動を単元を貫く形で設定し、単元構想に生かすことの大切さ」などを明らかにすることができた。一方、課題として「文学的教材を扱う単元の読み取りの時数減に対応する手立ての必要性」「文学的教材を学ぶときのねらいや必要性をより明確にすること」など、さらなる授業改善のポイントが見えてきた。

そこで、二年次は「文学的教材で読む授業の工夫」と「読むこと領域における評価の工夫」の二つについて取り組みたいと考えた。一つ目の「文学的教材で読む授業の工夫」については、「教材文」に対する意識の変換である。「教材文を教える」から「教材文でねらいとする言語能力を身に付けさせる」ことへ意識を変えていく必要があると考えた。そのためには、ねらいとなる言語能力に焦点を合わせながら、確かに身に付けさせていくための授業の工夫が必要になってくる。二つ目の「読むこと領域における評価の工夫」については、単元や授業でねらいとして設定する言語能力と密接に関連した評価規準を具体的な子どもの姿まで下ろして想定したいと考えた。また、自己評価においては、言語能力を身に付けさせるための一助ともなる累積型の自己評価を行うことで、一人一人が達成感を味わえるようにしたいと考えた。

以上の理由から、本年度授業改善の手立てとして二つの視点を研究の柱として、以下に述べるような仮説を設定し研究主題に迫った。

小学校国語科の「読むこと」領域の授業において、以下の二つの視点（「研究の概要」参照）に基づいた手立てを講じれば、子どもが読む観点を身に付けながら、伝え合って学習に取り組み、ねらいとする言語能力を確かに身に付けることができるであろう。

### 2 研究の概要

(1) 研究協力校において下記の二つの視点に基づいた授業を行い、その効果を検証する。

【視点1】文学的教材で「読む」授業の工夫

- ① 教材でねらいとする言語能力を身に付けさせる授業
- ② 伝え合いたくなる授業の工夫
- ③ 互いの考えのよさを認め合うための教師のかかわり
- ④ 読む観点の明確化と身に付けさせるための取組（6か年計画）

【視点2】「読むこと」領域における評価の工夫

- ① ねらいと評価の関連と具体化
  - ② 達成感を醸成する簡易累積型の自己評価
- (2) 授業の実践（研究協力校 いわき市立錦小学校 6学年1組）
- ① 実践授業1 単元名 「伝えてみよう！狂言」（総時数6時間）  
教材名 『柿山伏』『柿山伏について』『伝えられてきたもの』（光村図書6年）
  - ② 実践授業2 単元名 「賢治の作品を紹介しよう」（総時数9時間）  
教材名 『やまなし』『イーハトーブの夢』（光村図書6年）ほか

### 3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ① 国語科「読むこと」領域において、確かな言語能力を身に付けさせるための言語活動と単元構想の工夫の視点が明らかになった。（第一年次）
- ② 文学的教材の「読み取り」の時数減に対応し、ねらいとする言語能力を確かに身に付けさせるための授業改善のポイントが明らかになった。また指導に生かすための評価規準設定の工夫や、子ども自身が1時間毎に身に付けた言語能力を自覚し、達成感を味わわせることができる累積型簡易自己評価表の有効性が明らかになった。（第二年次）

(2) 今後の課題

単元のねらいを評価する際は、単元全体を見通して、単元終末には評価しにくい評価場面にポイントを絞った評価計画を立てておくことが有効であると思われた。